〔泌尿紀要18巻2号
1972年2月〕

泌尿器科紀要

第18巻 第2号

1972年2月

随想

第7回世界不妊学会会議に参加して

山根甚信

1971年10月17～25日の9日間，日本不妊学会および国際不妊学会連合によって，第7回世界不妊学会会議 VII th World Congress on Fertility and Sterility が東京と京都で共催され盛会裡に幕を閉じた．私はさいわいにこの会議に参加する光栄に恵まれたので，求められるままに短見を述べたいと思う．

世界不妊学会会議の目的とするところは，人類の福祉繁栄と家畜の改良増殖のため，その基本である生殖の諸問題について，医学と獣医畜産学両面の研究者が，その研究成果を持ち寄って切磋琢磨するにある．これは，1951年ブラジルの Rio de Janeiro でラテンアメリカ系の専門家によって，International Fertility Association が結成されたのが，そもそものはじまりで，この協会の主催で第1回の世界会議が New York で開催され，それから相次いで Napoli (1956), Amsterdam (1959), Rio de Janeiro (1962), Stockholm (1965), Tel Aviv (1963), Tokyo & Kyoto (1971) と開かれたのである．

私がこの会議に参加したのは，第2回のナポリ会議と今回の日本での会議の二つのみであるが，この両会議を比べてみると，わずか15年の間隔にかかわらず，文字どおり隔世の感を覚えるのである．

ナポリ会議では参加国45カ国，会員1,130人であったのに対し，東京会議では参加国56カ国，会員2,000人であり，邦人参加者はナポリでは，日本不妊学会会長故安藤画一博士と私のみであったに反し，東京会議では，邦人会員は450余人を数えた．会場についていえば，ナポリでは郊外の景勝地，モストラ・ドルトレマーレの丘上に建てられた一大殿堂で，当時うらやましいと思ったが，日本での会場となった東京プリンスホテルと国立京都国際会館を見るに至って，まことに意を強くした．従来，極東という名で，地球上の僻地のように考えられていた日本，そして敗戦の重傷を受けた日本で，かようなマンモス的な国際学会が開かれ，多数の外国研究者に深い満足感を与えたということは，全く驚異というほかはない．これもとより，日本の国力の進展と学術水準の向上によるはもちろんながら，主催者である日本不妊学会および大会組織委員会の絶大のご努力と，水も洩らさぬ周到なご企画に負うものであることを忘れてはならない．

だが，それかといって，手放しで驚嘆ばかりしてもいられないふしがないでもない．それは，この会議本来の目的の一半である家畜改良増殖の部門が遊離したように見えるから

である．ナポリ会議ではミラノ大学教授であり，L. Spallanzani 研究所長である Prof. Bonadonna が獣医畜産関係の二つの section の chairman となり，また円卓会議の moderator として，各国のトップクラスの獣医畜産の専門家を糾合した．大会特別講演では，スウェーデンの Prof. Lagerlöf が「雄性家畜の不妊に関する生物学的見解」の演題のもとに雄弁をふるった．東京会議でも，Baier（独），Blom（デンマーク），Chang（米），Edwards（英），Foote（米），Hafez（米），Leidl（独）等，繁殖生理学および人工授精のそうそうたる学者を迎えることができたし，特別講演としては，大会副会長の西川京大教授の「哺乳類の生殖に関する研究の最近の進歩」という，医学と生物学を結びつけた英語演説を聴くことができた．

しかるに大会参加者から見ると，日本側からの獣医畜産専門家は30名にも満たず（会員名簿による），講演者にいたってはさらに少なかったことは，どういうわけであろうか．巨費が投ぜられ，内外の研究成果が一堂に集められたのに，これを吸収し，消化する好機が逸せられたように思われ，いかにも惜しい気がするのである．もとより，大会への参加不参加は研究者個人の問題であるけれども，おそらく，この会議が医学者のみの会合であるように感ぜられたのも，その一因ではないかと思われるのである．

もとより，医学と獣医・畜産学は，その対象が人類と家畜と相異なるけれども，生殖問題については，自然界の支配から免がれた，いわゆる Domestikation の状態にあるがために，その原理においては類似するところが多い．それがゆえにこそ，このような世界不妊学会会議が開かれるのであって，もし，人類のみを対象とするならば，別に産婦人科や泌尿器科の学会が厳存するし，家畜のみを相手とするならば，すでに国際家畜繁殖学・人工授精学会が，4年ごとに開かれつつあるから，屋上屋を設ける必要を認めないのである．医学者が家畜の生殖現象を知り，家畜研究者が人類におけるこの分野の成果を他山の石とするところに意味があると思うのだが，どうであろうか．

このようにして考えると，日本にはじめて家畜人工授精を紹介された京都大学教授故石川日出鶴丸先生の偉大さが，いまさらのようにしのばれるのである．石川先生は助教授時代に欧洲に留学され，家畜人工授精の創始者，帝政ロシアの Prof. Ivanov の研究所を訪問し，この技術が，日本の馬の改良増殖に寄与することの大きいことに想い至り，当時の京大総長菊池大麓博士に一書を送って，この研究と人材の養成を強調された．先生は神経生理を専門とされていたが，神経生理と精子の運動生理とは無関係でないとの構想と，馬の改良が国家的重要意義をもつとの信念から，研究室内では越智真逸，浦本政三郎両博士に白鼠の精子生理を，フィールドでは，佐藤繁雄（獣医）および私（畜産）を馬の人工授精について指導された．この人畜を差別しない科学精神に対しては，今も頭が下がるのである．人工授精の可能性を，イヌではじめて実験した L. Spallanzani の名を冠したイタリーのミラノにある研究所は，本年4月創立35周年祝賀式を挙げるにあたり，石川先生を世界における人工授精の precursor として表彰すると風聞し，むべなるかなの感を深くするのである．